

第27回研究会報告

2025年9月21日(日)午後1時30分より4時まで帝塚山学院本部棟同窓会ホールにおいて第27回研究会が会員12名の参加のもとに開催されました。

第一の発表は本学会員中尾務さんによる「阪田寛夫『土の器』成立まで——資料紹介・昭和四九年阪田寛夫日記」でした。芥川賞受賞作「土の器」が完成するまでの1974年5月から3カ月間の阪田の心境を日記や手紙から読み解く興味深い発表でした。「土の器」は「文学界」1974年10月号に発表されましたが、前年7月に亡くなった母親のことを小説に書くように依頼したのは文藝春秋編集者高橋一清氏でした。阪田は6月12日に「足踏みオルガン」という題で書き始めます。中学時代に洗礼を受けた日である6月18日に、突然「土の器」という主題に気づき、小説の題にします。同じく突然高知高校時代の先輩から送られてきた池田浩平『運命と摂理』を読み、主題は摂理と、母と兄嫁の和解であることに思い及ぶのです。7月10日に初稿を脱稿。しかし高橋氏から仏教的な考えで終わっていると指摘され、後半を書き直すことになります。難渋した原稿が完成したのは締め切りを半月ほど過ぎた7月31日でした。作家にとって産婆役である編集者がいかに重要であるか、庄野潤三や阪田寛夫が東京に行ったのはなぜか、が理解できる発表でした。

第二の発表は本学会員下定雅弘さんによる「『反響』、『反響』以後の詩境」でした。前回の発表で取り上げられた『春のいそぎ』は伊東静雄が聖戦を讃美した詩集でした。それに対して『反響』は、敗戦後にきっぱりとその心情を断ち切り、第二詩集『夏花』で示された自然の真への希求や、家族を主とする日常への愛おしみといった詩境を成熟させていった詩集であることが述べられました。つまり敗戦後、伊東は卒論『子規の俳論』の頃の原点を振り返り、リルケ、ヘルダーリン、ギッシングを読んでその詩情、詩精神を自分の詩作の基軸としたのです。発表ではその特徴として次の4つの点が指摘されました。1. 口語による平明な表現。2. 擬人法を多用。3. 光と影(闇、夜、暗黒、死)とのコントラスト。4. 答えを明言しない。発表ではそれらの点を『反響』と『反響』以後の詩を一つ一つ読みながら解説されました。伊東が到達した「自然の真への希求」、「日常への愛おしみ」が聞いている者にも喜びとして伝わってくる熱のこもった発表でした。

第28回研究会報告

2025年12月14日(日)午後1時30分より4時まで帝塚山学院本部棟同窓会ホールにおいて第28回研究会が会員18名の参加のもとに開催されました。

最初の発表は、代表の河崎良二さんによる「阪田寛夫の童謡観」でした。

童謡作家として世に知られている阪田ですが、意外に自分の童謡についてあまり語ってはならず、河崎さんは童謡に関する阪田の三つの本『童謡でてこい』、『どれみそら』、『童謡の天体』からうかがえる阪田の童謡観を、日本の童謡の変遷に照らしながら浮き上がらせて行きました。

阪田は、昭和40年代ころから創作童謡の意義がなくなっているのではないかという意味の発言をして

います。阪田のめざした童謡は「メロディーとして自立して子供や大人のタマシイに入りこむ」ものでしたが、ビートルズやフォークソングの流行によって曲がギターで作られるようになり、「詩人の意図した微妙な言葉の音楽を」作曲者が捉え、「魅力のある歌」として定着させるというような作り方がなされなくなったと考えているからです。

阪田は、明治期に文部省が否定したわらべうたを、子どもたちが共通のものとして持っている感情のひろがりを伴っているがゆえに、非常に大切なものと考えていました。彼にとって童謡は寂しさや不安定なところから生まれるものですが、その自分の弱みを薄手の感傷主義にさらさず、暗さと明るさを合わせ持つような作品に仕上げていたことが証されました。

発表後には、阪田らが昭和 38 年に結成した「6 の会」の趣意書に述べられていたことは実践されたのか、わらべうたとはどのようなものを指すのか、等の質問があり、活発な応答が行われました。

第二の発表は山口志郎さんによる「伊東静雄と田中光子、そして三島由紀夫」でした。

昭和 19 年 5 月、三島由紀夫は処女短編集『花ざかりの森』を出版するに際して伊東静雄に序文を依頼するために大阪に来ました。三島は中学時代に伊東の詩を読み、心酔し、師と仰いでいました。伊東は自宅に招き夕食をご馳走しながら歓談しましたが、序文は断り、その日の日記に「俗人」と記しました。一方、三島の伊東に対する敬愛の念は生涯変わりませんでした。

その前年、無名の詩人田中光子が詩集『高原』を伊東に献呈し、指導を願い出しました。『高原』は伊東の『わがひとに與ふる哀歌』に想を得たものでした。伊東は田中の詩に興味を持ち、添削し、矢継ぎ早に葉書を三通出しています。その後、田中の第二詩集『晩春』出版のための指導を昭和 28 年まで続けますが、ほとんどは書簡によるもので、18 通が残っています。出版を目前にした昭和 24 年 6 月に伊東が肺結核を発病し、10 月に入院し、出版は取りやめになりました。伊東は昭和 28 年 3 月に亡くなります。その後田中の第二詩集は『わが手に消えし霞』として昭和 45 年に三島の助力で出版されました。三島が自決する一週間前のことです。その経緯を明らかにされた山口さんの発表は非常に興味深いものでした。

昭和 18 年から 20 年といえば、庄野潤三が伊東静雄から同人誌「まほろば」の中心人物林富士馬を紹介され、「まほろば」を通して三島と交流があった年です。今後、無名の詩人田中光子の情報が出てくれば、当時の伊東や庄野に新たな光が当てられることでしょう。

第 29 回 研究会開催予定

第 29 回研究会 2025 年 3 月 1 日（日）13：30～16：00 場所：帝塚山学院本部棟同窓会ホール
講師予定：米田華慧、倉橋みどり、高橋俊郎

公開講座「庄野潤三・阪田寛夫と朝日放送」

日時：2026 年 3 月 28 日（土）13:30 肥後橋フェスティバルホール 1 階ロビー集合

講師：佐々木安博氏（当学会会員）

「庄野・阪田時代の朝日放送」について佐々木氏が解説し、周辺をまち歩きした後、朝日放送テレビの局内を見学します。